

## 自ら問いをもって学ぶ児童の育成

E1 グループ 名古屋市立常磐小学校 加藤 秀一

### 1 研究のねらい

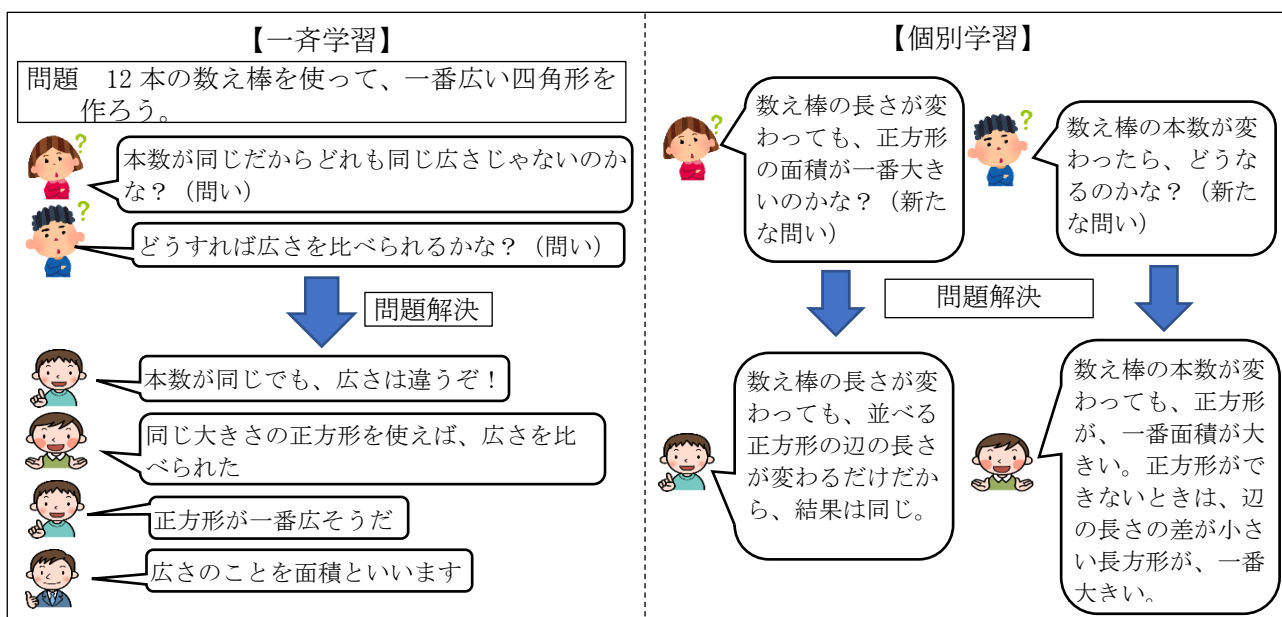
現在、わが国は生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により、社会構造は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代と言われている。学習指導要領解説算数編(2017)では、社会の急速な変化に対応するために必要な資質・能力を育成することの重要性が述べられている。樋口(2020)は、「新学習指導要領が提示されてから、探究や問いを立てるといふことの重要性が高まっている」と述べ、児童の「問い」を中心とした授業展開を大切にしている。なお、樋口(2020)は、「子どもたちの中から生じる疑問、問題意識、探究心」を「問い」として捉えている。

私は、このような予測が困難な時代を生きるために「自ら問いをもって学ぶ児童」を育てたい。私が考える「自ら問いをもって学ぶ児童」とは、問題に出合ったときに、自分なりに問いをもって解決に向かい、解決の過程や結果から、新たな問いを見いだすことができる児童のことである。ここで、私が考える「問い」とは、児童が「あれ、おかしいな」と感じた疑問や違和感、「〇〇について考えたい」という探究心のことである。

昨年度、私は、「主体的に学ぶ児童を育てる算数学習」をテーマに、「問い」に焦点を当てて研究に取り組んだ。問題提示を工夫することで、「問い」をもたせることはできた。しかし、クラス全体で考える問いを決めて解決に取り組んだため、考える問いが限定されてしまったという課題が見られた。さらに、1つの問いの解決で満足してしまったり、解決困難な問いを見いだして困ってしまったりする児童の姿も見られた。これらの原因として、児童の問いを引き出す働き掛けが不十分であったことや解決すべき問いについて話し合わせる場が不足したことが考えられる。

樋口(2020)は、単元の中で、児童が考えた「問い」を解決する時間を設けている。奈須(2022)も著書の中で、単元内自由進度学習という学習方法の重要性を述べている。私が考える児童像に迫るためには、これらのように、児童自らが「問い」を解決していく場は必要である。しかし、奈須(2022)が、提案する「学習方法や学習内容を子どもに委ねる」という学び方は、本学級の児童には、難易度が高いと考える。さらに、単元の中では、全体で確認すべき、知識・技能の習得に関する「問い」があると考える。加藤(2022)は、新しい知識を発見する「一斉学習」と、獲得してきた既習事項を使って探究する「個別学習」を授業内や単元内で分けて取り入れていく必要性を述べている。

そこで、今年度は、単元内自由進度学習の方法を取り入れ、一斉学習の場と個別学習の場を設ける。一斉学習では、「新しい知識・技能の習得に関する問い」を扱い、知識・技能の習得を目指し、個別学習では、「既習事項を使って探究する問い」を扱い、見いだした問いの解決を目指す。このように問いの内容を分けて学習を進めることで、一斉学習では、問いが限定されてしまうが、新たな知識・技能を習得することで、個別学習で新たな問いを見だし解決に向かうことができるようになると思う。目指す児童の姿は、例えば、4年「面積」の学習では、以下のような姿である。



【資料1 自ら問いをもって学ぶ児童の一例(4年「面積」)】

## 2 研究の内容

(1) 対象児童 5年生 35人

(2) 研究の手立て

### 手立て① 問いタイム

#### 【一斉学習】

様々な問いや解決方法が考えられるような問題設定を行う。児童の問いを共有し、本時に解決すべき問いを話し合わせることで、学級で問いを選択し、解決に向かうことができるようにする。

#### 【個別学習】

児童の問いをロイロノートで共有し、互いの問いを解釈し合わせることで、自分が解決したい問いを選択して解決に向かうことができるようにする。

### 手立て② 振り返りタイム

#### 【一斉学習】

問いの解決過程や結果をロイロノートで共有する。解決過程や結果を見比べさせ、共通点や相違点を話し合わせることで、次時につながる新たな問いを見いだすことができるようにする。

#### 【個別学習】

それぞれの問いの解決過程や結果をロイロノートで共有する。解決過程や結果を見比べさせ、共通点や相違点を話し合わせることで、新たな問いを見いだすことができるようにする。

(3) 検証方法

### 検証① 問いタイム

問いを選択し、解決に向かうことができたかどうか、ノートの記述からつかむ。

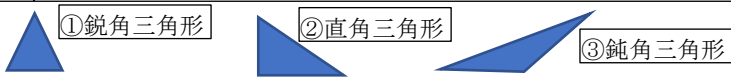
### 検証② 振り返りタイム

新たな問いを見いだすことができたかどうか、ノートや振り返りシートの記述からつかむ。

## 3 実践例

(1) 単元 5年「合同な図形」(8~10/13)

(2) 目標 三角形の内角の和を用いて、多角形の内角の和の求め方を考えることができるようにする。

	主な教師の働き掛け	主な児童の反応
	<p>問題 次の図形はどのような仲間でしょうか。</p> 	
一斉学習	<p>T: どんなことが言えそうですか。 T: 三角形ということ以外に同じところはありますか。 T: 今日考えたいことは何ですか。 (自力解決し、解決過程や結果をロイロノートで共有する)</p>	<p>C: すべて三角形です。 C: 面積や辺の長さは違いそうです。 C: 違うところはたくさんあるけど、同じところはあるのかな。 C: 3つの三角形の同じところはどこか。(問い)</p>
	<p>T: みんなの考えを見て、思ったことはありますか。</p>	<p>C: どれも角の大きさの和は <math>180^\circ</math> だったけど、他の三角形でもそうなのかな。(新たな問い) C: 四角形だったらどうなるのかな。(新たな問い)</p>
個別学習	<p>T: ロイロノートの中のみんなの問いを見て、解決したい問いに取り組もう。 T: みんなの考えを見て、気付いたことはありますか。</p>	<p>C1: 他の三角形でも角の大きさの和は <math>180^\circ</math> になるのだろうか。(問い) C1: どんな三角形も <math>180^\circ</math> になった。 C2: 四角形の角の大きさの和は、どうなるのだろうか。(問い) C2: 四角形は対角線で、三角形2つに分けられるから、<math>360^\circ</math> になる。 C: C2のように対角線で三角形に分けていけば、五角形や六角形でも角の大きさの和が分かりそう。</p>

〈参考文献〉

樋口万太郎(2020)「子どもの問いからはじまる授業！」 学陽書房出版

奈須正裕(2022)「個別最適な学びと協働的な学び」 東洋館出版社

加固希支男(2022)『『個別最適な学び』を実現する算数授業のつくり方』 明治図書出版